

審査員からのメッセージ

審査員
石川 初(慶應義塾大学 環境情報学部 教授)
加藤 耕一(東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授)
高井 啓明(株式会社竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア)
西田 司(オンデザイン代表 / 東京理科大学准教授)

メッセージ

石川 初

慶應義塾大学 環境情報学部 教授

この賞に「これからの建築士」というタイトルがつけられているのは示唆的であると思います。どれほど素晴らしい実績をもっていても、それは既に達成された建築士の仕事であり、「これまでの建築士」です。これからの建築士は、これまでの建築士の積み重ねを踏まえつつ、まだ誰も知らない「これから」を身をもって指し示すことが期待されます。ただ、「これからの」は単に未来の建築士のありかたを示すのではなく、実践によってその「これから」が予感されるものであることが重要です。建築は何よりも実践だからです。さらに、建物の内部と外部、作る人と使う人などの境界や分担が曖昧に、より混ざり合いつつある今日、建築の実践の有り様もこれまでとは異なるものになるはずで、これまでの建築士の範疇を超えた実践をうっかり繰り返すうちに新しい建築士像を描き始めてしまったような、そんな「ヤバイところに踏み出した」皆さんの最前線からの報告を期待しています。

加藤 耕一

東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授

20世紀以降の現代建築は、モダニズム以前の建築とは完全に断絶したものであると、私たちは信じ込まされてきました。従来の近代建築史教育がそう仕向けてきたともいえます。とくに日本の建築界は、純真無垢なまでに、現代建築はモダニズムから始まると信じてきました。その確信は、20世紀の日本の建築界を世界に飛躍させたかもしれませんが、21世紀社会の行き詰まりのなかでは、かえって足枷になっているようにも思われます。なぜなら私たちは、わずか100年の視野でしか現代建築を見ることができず、建築の問題をもっと長期の歴史的な視野から考えることができなくなってしまったからです。

しかしそんななかでも、20世紀的常識／モダニズム的建築観の呪縛を軽々と乗り越えていくような試みが、あちこちで登場しています。私自身は歴史家として、たとえそれが小さな一歩であったとしても、未来を革新的に切り拓くようなチャレンジを見てみたいと、楽しみにしています。

高井 啓明

株式会社竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア

昨年に続いて賞の審査に加わせていただきます。

人口縮減・少子高齢化していく日本において、既に多くつくられてきたストックとしての住宅・建築やまちがあります。この膨大なストックにおいて、空洞化したまち、空き家、空きビルの再生、活用、改修、緑地化などが大きな社会課題となっています。本賞においても、ストックの再活用や改修の提示案が多く見られるようになりました。また、既存建物で脱炭素社会の目標である2030～2050年の運用時のCO2排出量をどこまで削減できるのかが、大きな課題となっています。

一方、建設に伴うCO2排出量が最近大きくクローズアップされてきました。例えば50年のライフサイクルで見ると、建設と改修時の排出量が運用時排出量とほぼ同等であると言われるようになりました。これに対して、ストック活用の拡大はもちろんですが、建築マテリアルのリサイクルや生産の技術革新が喫緊の課題となっています。

このような改革の具体的な実施は、建築主や住まい手、建築士や建築関連資格者、建築産業界に委ねられています。未来の環境に資する、発注者や住まい手、地域を巻き込んださらに新しい活動や実践など、「これから」を予感させ、建築士として一石を投じるような応募に期待しています。

西田 司

オンデザイン代表 / 東京理科大学准教授

建築士の職能は設計を行う専門性のはずが、そこから一歩二歩、専門性の枠を外側へ拡げている人が増えている。設計の上流の企画や開発を行ったり、竣工後の建物に継続的に関わったり、都市部だけでなく、地方に軸足を移し、地域で活動したり、設計だけに留まらず自身で運営や管理を行ったりと、かなり広範囲に渡る。その専門性の拡張から産み出される建築や設計に興味ある。設計は環境が変わればインプットが変わり、専門性が変われば設計の与条件のリアリティが変わっていく。これまでの設計や建築を再生産するのではなく、これからの建築と設計を考え、トライアンドエラーを繰り返していくことで、建築の未来をひらいていく。これからの建築士賞は、建築士の賞であるとともにそこから作られていく建築と建築文化のこれからを考える場である。